掌編連作 愛

灰谷爽冶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
掌編連作　愛

【Ｎコード】
Ｎ９２９７Ｈ

【作者名】
灰谷爽冶

【あらすじ】
あなたにとって、それは何ですか。どこにあるのですか。わたしたちはいつも、偽物ばかりしか手に入れられない。傷つき間違う、臆病なわたしたちは―――。名もなき人物たちが織り成す、「愛」をキーワードにした掌編集。

1. 免罪符

長く親交のあった男と酒酔いの勢いに任せて寝た。
わたしをよく知る古馴染みのひとりだったが、恋愛感情はひとつもなかった。
関係を持った後でわたしは男を避けた。
きまずかったし、彼と本当の意味で男と女の関係になるつもりはなかったからだ。

けれど向こうの思惑はそうではなくて。
それから携帯電話にはよく連絡が入るようになった。
着信拒否こそしなかったけれど、電話にもメールにも出なかった。
諦めてくれることばかり願っていたある日、男はわたしの家に来た。

どうして俺を避けるのだと、怒った顔で男は聞いた。
わたしには上手な言葉がみつからない。
思うのはただ最悪の場合ばかりで、ただ恐怖の前に立ちすくんでいた。

昔から、愛という言葉が嫌いだった。
わたしに近づいた者たちはみんな、その言葉を振りかざしてわたしを傷つけたからだ。
愛という言葉に刃を隠して、わたしの心の一番柔らかな部分を切り裂いたから。

利己的な母は愛の名の下にわたしを調教し、己に都合の良い存在としてわたしを利用し続けた。
横暴勝手な父はわたしを侮辱し軽んじ続けながらも、それを『上手く伝わらぬ愛』という言葉にすりかえて罪から逃げた。
最初にできた恋人は、愛するが故だと叫びながら毎日わたしを殴って犯した。
その後出会ったわたしが初めて愛した人は、愛を理由にわたしと一番親しかった友人と手を取り合って去った。

わたしにとって、愛は免罪符でしかない。
わたしを誰よりも傷つける人たちが使う、自分達がわたしに対して振るう、暴力の正当な理由なのだ。
わたしを利用したい詐欺師たち、みんなが使う隠れ蓑。
ばかなわたしを騙すのには、あまりにも都合の良い甘い菓子。

わたしが避けていたこの目の前の男は、わたしが思うことを知っていた。
わたしがつらい思いをした出来事の、それらすべてを知っていた。
それだけの長い時間、彼はわたしの傍にいた。
わたしの傷と、涙と、悲しみの傍にいた。

わたしは彼を決して愛さなかった。
彼もわたしを、女として見なかった。
だからわたしは、わたしを裏切らないたったひとりの存在を、かろうじて手にすることができていた。

言葉もなく立ち尽くすわたしのすぐ傍まで、男は近寄ってきている。
電話に出ないこと、メールの返信をしないことを怒っているのに、
その目は怒っていなかった。
その目を見たくないと思った。
わたしの中の誰かが何事かを叫んだけれど、その言葉まではわたし
には届かなかった。

男はなぜ、あの日わたしを抱いたのだろう。
やはりお前もまた、わたしを切り裂く詐欺師の一人なのか。

最早俯くしかないわたしに、ひどく優しく強引な手つきで男が触れ
る。
返答を持たないわたしを上向かせ、深い目で見つめる。
悪い予感は当たるものなのだ、だから生きることはこんなにも苦し
い。

少しかさついた唇を重ねられて、目から溢れた恐怖と絶望の雫が、
触れ合った場所に滲みた。

なあ、お前。
お願いだから、わたしを愛しているなどと言わないでくれ。

本当にわたしを愛しているのなら、詐欺師たちとおなじことなど言わないでくれ。
お前のその心のどこまでが本物で、どこからが偽りなのか、愚かなわたしにはわかるはずもないのだ。

もしもわたしを本当に愛してくれるのなら、ただわたしの唯一の味方でいてくれ。
それ以上の事をわたしは何も求めない。
愚かなわたしにはお前の姿が見えないのだ。
たとえば最初から、お前がわたしの味方でなく詐欺師であったのだとしても、愚かなわたしではそれを見抜く力などない。

もしも少しだけでもお前に慈悲の心があるなら、わたしに詐欺師のお前を見せないでくれ。
わたしの手に宝はもう残ってはいないのだ。
お前が奪える価値あるものなど、わたしはもう何一つ持ってない。
あるものといえば、手垢だらけの勝手な絆ひとつ。
わたしにはもう、そのほかにはなにもない。

男の冷たい唇は、悲しい未来の味がした。
涙に濡れた口付けは別れの合図と、大抵相場が決まっている。
男の愛に撃ち抜かれて、小さな望みは息の根を止めるのだろう。
古馴染みのお前をなくしたわたしの心は、詐欺師の胸と両腕を墓場に眠るのだ。

だからどうかこの刹那だけ。

もうすこしだけわたしに、都合良く甘いひとときの夢を見せてはくれないか。

愛する男に口付けられる、幸福な女というかりそめを。

2. 共犯関係

疲れて仕事から戻る帰り道、久しぶりにあいつを見かけた。
三年前、雨の夜。
おれが裏切って捨てた女。
不器用ながらもまっすぐに見つめてくるその目から、おれはあいつの親友を道連れに逃げた。

見かけたあいつは綺麗になっていた。
感情に乏しそうな男に連れられて、話しかけられるとはにかむように表情を緩めた。
男は前を向いて歩きながらあいつの手を取って、あいつは指を絡めてそれに応えた。
あいつの仕種に男が小さく笑って、あいつはひどく嬉しそうに笑い返した。

抱かれるときに手を繋いでほしがった、あいつの癖を思い出した。
重く塞がれる気持ちと疲労を引きずって、足早にそこを後にした。

あいつのことは、おれなりに大事にしていたつもりだった。
多分それは、愛していたって言えるくらいに。
あいつは人の真心に飢えていて、守ってやりたいといつも思っていた。

逃げ出したくなったのは、一緒に住み始めてからしばらくのこと。

あいつの心にあいた穴があんまり深くて、自分まで吸い込まれそうなくらいだったから。
思い知らされたことは、人はどうやったってひとりで、誰かと一緒にいてもそれは変わらないこと。
絶対にどうにもできない孤独を知っていてなお、一途な心をおれに向けるあいつが怖かった。

逃げた先が今の女。
当時のあいつの、たったひとりの親友。
あいつと違って男慣れしていて、真摯な付き合いの息抜きには丁度良かった。
恋人と親友に隠れての逢瀬を、バカなおれたちはスリルと勘違いして楽しんでいた。

家に帰ると、女はじっとテレビを見ていた。
たいして楽しくもなさそうな様子、ありあまる時間を潰していますと言わんばかりの姿。
食事こそ用意してくれているけれど、ただいまも言わなければおかえりも言わない。
話す話題も大してなく、顔を見ることもほとんどない。

そんな状態が、もうずっと続いている。

今おれとこの女を繋いでいるものは、あいつを裏切ったというその『共犯関係』だけだ。
当時のおれはそれに『愛』という仮面をかぶせて、誰よりも愛を必

要としていたあいつを捨てた。
けれどあいつはおれのことも女のことも、どちらも責めようとしなかった。
ただ瞳の奥に、いつかにおれが気付いてしまった、あいつの中の底なしの闇が見えた。

おれと女は少し遠くに住処を見つけて、しばらくは隠れるように暮らしていた。
最初の頃は昼夜を問わずに抱き合って、何日も家から出なかった。
何かを無理やり忘れるように女と身体を繋いで、サルのように交わり呪いのように愛を囁きあった。
互いにそれが自己暗示の錯覚で、ただの逃避だとわかりきっていた。

あいつはおれたちのことを、本当に信じていた。
数少ない本物の理解者だと、親友のこの女を紹介したあいつは誇らしげな顔をしていた。
女からも、おれはあいつが本当に好きになった、初めての男なのだと聞いていた。
いつも自慢げに話しているわ、と、おれに裸に剥かれながら、女は意味深に笑ったものだった。

ここにいる女は、わたしを愛しているかと決して聞かない。
おれも決して、女におれを愛しているかと聞かない。
おれたちは臆病な裏切者なのだ。
似たもの同士が詭弁を振りかざし、自分のしたことから目を背けているだけにすぎない。

あいつに会ったと、女の背中に投げた。
今日目にした出来事に、一人では耐えられなかった。
身体に緊張を走らせながら、女はそう、とだけ答えた。
綺麗になっていたと続けると、女はまたそう、とだけ答えた。

知っている。
夜中の二時半、マメ電球の明かりしかないキッチン。
携帯電話に残るあいつのメールを読み返し、女は時々泣いている。
大事だった親友の思い出で自分を傷つけて、最後におれの身体に逃げてくる。
そんなこの女を不憫に思う、おれの心には一体どんな名前をつければいいのだろう。

何故ついてきたんだと、あいつから逃げてしばらくした頃に聞いたことがある。
逃避行の興奮なんざとっくに冷めて、残った絆は後ろめたさと罪悪感。
女は質問など聞こえなかったかのように、流しで汚れた皿を洗い続けていた。

あいつは今どうしているだろうか。
となりにいたあの男と一緒にいるのだろうか。
その男はあいつを愛してやっているのだろうか。
愛に飢えたあいつの心と体と傷ついた魂を、優しく抱きしめ癒してやっているのだろうか。

（あの日のおれのように）
あいつはそれを受け止めて、男に抱かれてやっと手にした幸福に笑うのだろうか。
（あの日おれに見せたように）

男はあの頃のおれのように、あいつをくるんでいるのだろうか。
あいつはあの頃のように、男にあたためられながら眠るのだろうか。

おれでない男に愛され慈しまれているあいつ。
おれでない男を愛して、微笑んでいるあいつ。
今日突きつけられたその事実が、おれをひどく苛んでいる。
この胸の内の苦しみこそが、何よりの証拠だ。
もう認めてしまっていい。

三年前のあの雨の夜、あいつではなくこの女を選んだことは、おれにとっては取り返しのつかない、大きすぎる過ちだった。

後悔しているかと、女の背中に向かって尋ねた。
女は初めて、おれの目の前で泣いた。

3. 褒賞

友情か、愛情か。

選択を迫られたとき、私はいつも愛情を選んできた。
金蔓になるのは男だ。
友情は長く続くかもしれないけれど、私のお腹を満たしてはくれない。
それならたとえかりそめでも、カネを生んでくれる愛情のほうが都合がいい。
だから私は、そうやって生きてきた。

あの時もだから、いつもと同じようにした。

あの子は何年来の付き合いのある、私にしてはかなり長く親しくしている人間だった。
臆病で、傷つきやすくて、見るからに垢抜けない女の子。
でも話や好みが何故だか合って、喋っていても黙って一緒にいても楽しかった。

世の中にはこんな人もいるんだ、まあなんて珍しいこと。
それくらいにしか思っていなかったつもりだけど、本心は違うところにあったらしい。
彼女のことを私は、いつの間にか『親友』と呼ぶようになっていた。

ある時彼女が、自分の恋人を紹介してくれた。
年は少し上で、なかなかいい男。
好みが合ったと話したとおり、男のタイプも私と共通していた。

つまり彼女の恋人は、私の好みの男性だった。

その彼の心の真ん中に、あの子の存在は深く埋まっていた。
少しの羨ましさを感じたときに、彼があの子との関係に疲れ始めていることに気が付いた。
ちょっとの好奇心と膨らむ嫉妬、それから大きな自信が、わたしの背中を押した。

彼の気分転換と、私の癖の悪いおたのしみ。
利害とタイミングが一致して、私達は秘密の恋人ごっこを楽しみ始めた。
軟派に見せて心は誠実な彼のため、私はあの子のレプリカになることにした。
あの子に良く似た、あの子より気軽に付き合える女に。

場数を踏んでいる私の方が、ゲームには向いている。
レプリカである限りは褒賞として、私は彼の愛を手に入れられる。
その時の私は、そんな風に思っていた。

ムキになったのは、一緒に眠っているとき、彼が寝ぼけてあの子を呼んだからだった。
愛おしそうなその声に、強烈に、屈辱的な事実を突きつけられた気がした。

この男が本当に愛を注いでいるのは、今抱いている私じゃない。
どんなに私とこうしていても、男は私を見ていない。
ご褒美をくれるのは私がレプリカだからじゃなくて、彼があの子を好きだからだ。
彼はきっと、あの子に似せた『誰か』であれば、誰にでも褒賞を与えるのだろう。

例えそれが、私ではなくても。

そこまで考えて初めて、私は自分が、彼に本気になっていることに気がついた。
気がついてしまったからには、どうしても欲しかった。
彼に愛されるあの子がずるいと思った。

私だって、両親とうまくいかなくてずっと傷ついてきた。
私だって、手に入らない本当の愛に、寂しくて泣いて夜を明かした事が何度もあった。

なのにあの子にだけ、彼という救いがあるのが許せなかった。
私より劣ったあの子に、何故素敵な彼が与えられるのか納得できなかった。

私の悪意は経験に裏打ちされ、あっという間に実を結んだ。
男はあの子を捨てて私と遠くに逃げてくれた。
壊れるほどに激しく抱かれ、愛していると言われながら、私は喜びに浸りきっていた。

ところが幸せは長くは続かず、彼との生活はすぐに苦痛になった。
彼がちょっとした瞬間に、あの子を思い出しているのがわかったからだ。

少し浮いた目線、会話の中の一瞬の沈黙、私の料理を食べたときの反応。

些細な日常の中で、彼は無意識にあの子を探していた。
私はまだレプリカでしかないことを、まざまざと思い知らされた。
それは実に、実に不愉快なことだった。

苛立つ気持ちを誰かに話したくて、携帯電話を開いた。
電話帳で話し相手を選ぼうとして……愕然とした。

私がいつもこういう話をしていた相手は、たった一人だった。
私が恋人を奪ったあの子。
初めて愛した人を私に奪われた、私の親友。

あの子はいつも、私を否定しなかった。
私が誰かの浮気相手になっていることなんてしょっちゅうだった。
だけどあの子は、倫理やモラルを振りかざしてそれを咎めたりなんて、絶対しなかった。

私が辛くないならそれでいい。
人間の気持ちなんて、そうそうルール通りになんかならない。
あの子はよくそう言って、私に笑ってくれた。
あの子はいつだってそうして、私の味方でいてくれた。

昔のメールの中から、あの子がくれたものが見つかって、それを私は必死で読んだ。
つまらない用件や内容であっても、あの子の小さな心遣いや思いやりが詰まっていた。
あの子はそういう子だった。
誰より優しくて、細やかな気遣いができて、だからこそ繊細で、傷つきやすくて。

取り返しのつかないことをしてしまったと、気付いたときにはもう遅すぎた。
泣いても泣いても、この気持ちはもうあの子には届かないって、分かりきっていた。
止まらない涙で顔を濡らしながら、それでも私は、あの子がくれたメールに向かって、謝り続けずにはいられなかった。

愛は、私にとっては何よりの褒賞だった。
たとえかりそめでも、愛はお腹と身体を満たしてくれたから。
けれどそれに目がくらんだ私は、自分にとって一番大切なものを、自分のこの手で壊してしまった。
だから私にはもう、どちらも手に入らない。

本物の友情も、本物の愛情も。

4．支配と贖罪

あの日。
慣れない酒にへべれけになって、へらへら笑いながらお前は泣いた。
カウンターに、疲れきった身体と心をあずけて。

愛って言葉が一番嫌い。

出逢った頃から、お前はよくそう言っていた。
あの時お前は１５歳。
俺は気楽な大学生。
家庭教師のバイトで最初の教え子で、家も結構近くて、なんとなく続いた腐れ縁。

お前は俺の高校の後輩になって、同じ大学の、同じ学部の後輩になって、社会人になった。
お前は明るさがとりえで、誰と仲良くなるのも早くて、けれどとても孤独だった。
最初の印象にみんな騙されるんだ。
お前は本当はひとりが好きだし、寂しがりでも人好きでもない。
傲慢でも自信家でもなくて、臆病で繊細なくせにお人好しだから、
よく人に利用されるんだ。

それでも誰より優しいお前は、人を信じることをやめなくて。

なんてことはない、ただの偶然だった。
ビルの陰に隠れた男女がおおっぴらにいちゃついていたのを、他意もなく向けた視線が捉えてしまった。
女の方と目が合って、笑いかけられたのが気まずくて。
慌てて顔を逸らす前に、男もこちらを振り向いて。

そいつらが、あとからお前が写メで見せてくれた、お前のイイヤツとお前の親友だった。

黙っていたのはどうしてだろう。
言えなかったといえばそうだし、言わなかったといえばそうともいえる。

それからしばらくしたあの日、お前はいつになくハイペースで飲んだ。
俺の知らないうちにお前がまた何か、ひどい苦しみを味わわされたことはすぐにわかった。
けれど今度は、ひとつだけ違っていた。
俺はお前に聞かずとも、お前の苦しみの内容を知っていた。

恋人が、親友と一緒にいなくなった。

ろれつの回らぬ舌で、陽気な口調でお前は言った。
言いながら、いつものようにお前は笑った。

本当につらいとき、お前は虚ろな瞳で笑う。
何が可笑しいもんか、泣けばいいだろと怒る俺を、お前はいつだって、優しいねえとまた笑う。

そのお前が、その時ばかりは笑いながら泣いていた。
苦痛であればあるほど泣かないお前が、酒に酔っ払って、草臥れきったように打ち伏して、にやにやしながらはらはら涙を流していた。
頭の中で、何かが砕ける音がした。

酒の勢い、何かの弾み。
たとえ女と寝ることがあったとしたって、お前に限ってそんなことは絶対にない。
俺にとってお前は、そんな軽いのりで抱けるような女じゃなかった。

それからお前は俺を避けて、俺はそんなのを赦さなくて。
大層勝手な足取りで、お前の内側に踏み込んだ。
傍でずっと見ていた俺は、よくわかっていた。
お前が何に怯えているか。
お前が何に飢えているか。

俺を拒めないお前の心情を利用して、二度目は強引にお前を抱いた。
そのくせ誰にも真似できないくらいに優しくしたものだから、お前の無意識はあっけないほど容易く、俺の鎖に繋がれた。
もっと早くにこうしてたら良かったと、過去をひどく後悔した。

愛が嫌いだと言って憚らなかったお前に、俺はどう向き合うべきか、ずっと考えていた。

迷っている間に時間は過ぎて、俺が知らない間にお前は両親を見限って、最低な男に処女を奪われて、そうして大人になっていた。
俺がお前の傷を知るのはいつも、お前が苦痛を一人で耐え忍んだ後だった。

今日も俺はいつものように、物言わぬお前の身を開いた。
一言も言葉を発さないお前はけれど、日々俺に従順になってきている。
目が揺れている。
繋がりながら俺に手を差し出す。
その手を握ればお前は泣く。
俺の方こそ泣きたくなる。

か細く喘ぐお前の唇を、衝動のままに深く塞いだ。
息もさせないようなそれに、それでもお前は応えた。
首に腕を回され求められては、こちらから離れるなんてことはできなかった。

愛していると、できる事なら言ってしまいたいたかった。
お前に伝えるべき相応しい言葉を、俺は他にもちあわせていなかった。

俺はお前の、本当の味方になりたかった。
遠くで傍観しながら、お前に無責任な応援や励ましを投げる存在でいるのはうんざりだった。
お前が振り向けばすぐそこにいる、いつでもお前を助けられる何かになりたかった。

そのことを、ただお前に知っていてほしかった。

けれど俺は間違った。
俺がしていることは支配と贖罪だ。
思うままにお前を貪って、同時にお前に償っている。
無断でお前の中に入り込んで、負い目の分だけ唇を落として。

わかっている。
こんなものは決して、愛の代わりになんてならない。
でも俺のような莫迦な男では、こんな形の外に術を知らないのだ。
お前を支えて、慈しんで、くるんで温めてやる術を、俺は外に知らない。

こんな愚かな形のほかに、俺はお前を愛する方法を知らないのだ。
誰よりも愛に怯える、誰よりも愛しいお前の傷を、ただ癒してやりたいだけなのに。

何度も繰り返した口付けのあと、どんな隙間も許さぬように、お前をきつく抱きしめた。
俺の方こそ、お前がこの手をすりぬけていくことに怯えていた。
決して言えない言葉の代わりに、祈るようにお前を呼んだ。
お前は素直に俺に抱かれながら、ただ小さくうん、とだけ答えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9297h/

掌編連作 愛

2010年10月8日23時00分発行